



○編む

私の学生時代の専攻は絵画それも油絵でした。今はその方面の制作活動をほとんどサボっています。現在の制作活動は編み籠が中心です。材料は竹や籐などの自然素材ではなく紙バンドやPP(ポリプロピレン)バンドが中心です。竹で編まれた繊細な造形は立派な芸術作品と言えるほど美しいものです。竹は時期を考慮して伐採し、保存しておき、材料のひごなどに加工して編んでいきます。使い方によっては一生のものであり、使い込むほどに味わいも増していきます。それに対して紙バンドやPPバンドは本来“荷造りひも”として製造されたものです。通常はその役目を果たしたあとは捨てられる運命です。しかし、籠の材料として利用できることが知られてから、今は大変カラフルな紙バンドも販売されています。PPバンドも工芸作品制作用に製造されたさまざまな色彩のものが販売されています。竹にない紙・PPバンドのよさもあります。そのよさの一つは制作が手軽なこととごみが出にくいということがあります。

私が紙バンドに出会ったのはもう 35 年以上前になります。採用試験の学習中、役に立つであろうと思って購入した本に紹介してありました。旧文部省が発行した中学校美術教育(工芸分野)の実践事例作品集です。中学生が作った紙バンドの編み籠がありました。中に山口県の中学生が作ったものもありました。その時に身近に感じていましたが、数年後にそれを指導した先生と出会い、仲間と一緒に講習を受けたのが「編む」ことへのきっかけです。実際に竹を割り、ひごを作り、柳井名物の「金魚ちょうちん」も作りました。

それ以後、授業の題材に取り上げたり、個人的にも細々と制作を続けていましたが、創作活動の中心にまではなっていませんでした。年齢を重ね管理職になると生徒への対応だけでなく、保護者や地域の方への対応の機会が増えました。そういうとき堅い(?)勉強の話だけでなく、お互いの関係を近く親しくさせてくれるものはないだろうかと考えたときにこの編み籠がありました。最初は「家庭教育学級」という堅い名称で始まりましたが、「ものづくりの会」というふうに変更してから今も続いています。

授業で扱っていた時に感じたことです。生徒は制作が初めてですからみんな戸惑います。30 数人いたら常時 4~5 名は質問(編み方)のために手を挙げています。教師は私一人ですので対応に大忙しでした。そんなバタバタした授業でしたが、一つ発見がありました。通常の教科の学習(体育も含めて)などでは目立たない成績の子でも、クラスに一人くらいこの編み籠の制作できらりと光るくらいの「才能」を発揮する子が見つかるのです。そういった子たちに共通するものを一言だけで表現すれば「生活力」だったように思います。

大げさな表現になりますが、「編む」ことは人間の文化の始まりだと私は思うようになっていきます。絵を描くことが子どもの成長の始まりと言えるかもしれません。それと似ていますが、編むことが人間の生活を便利にし、文化を発展させてきたとも思っています。毎日着ている服や着物は主に縦糸と横糸で編んであります。草の蔓(つる)や竹で編んだ籠は、両手よりも多くの物を持ち運ぶことができます。こじつけかもしれませんが、現在の情報社会のネットワークも「編まれている組織体(社会)」というふうにも私は感じます。

余談ですが、「糸」という歌がありましたね。また「舟を編む」という、辞書を編集する人々を描いた物語もありましたね。



自分が籠を編んでいるときは、上述のような難しいことは考えていません。結構「無」になっています。細かで面倒な作業に見えますが、気持ちが落ち着くので私には向いているようです。